

---

# 死徒として

(´・`・`)

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

死徒として

### 【コード】

N0613L

### 【作者名】

( . . . )

### 【あらすじ】

アルクエイドのそばにいたことをもとめ、死徒となった遠野志貴だったが…

000 (前書き)

オナニー小説なんだお！

(Side - Shikiki)

そう、何十年前の事だったろうか。

はっきりと覚えているのはアイツ・アルクエイドが美咲町を去っていった直後ってことだけ。

あの当時は、アルクエイドがいなくなってしまうって自暴自棄になってしまった…と思う。

寂しかった。

アイツの存在が当たり前になってしまった俺にはとてもつらかった。

それからしばらくしてからのこと。

突然アイツに導かれているような気がして、俺はいつの間にか、公園へ向かっていた。

公園に足を踏み入れた瞬間、確かにアイツを感じたんだ。

ベンチに座っていた女の子と、アイツが重なって見えた

その瞬間もつ何も考えられなかった

シタイ

アイツヲ シタイ

気がつくくとセツ夜を持って走り出していた

真後ろに移動し、17分割にすべく手を動かそうとし、…

その時、体が動かない事を理解した

ゆっくりと振り向いた女の子の目を見た瞬間、生物としての格を思い知らされた

しかし、その子は笑いかけると、隣に座って、歓談をしようと提案してきた

いや、拒否権が無い以上、命令と言つべきか。

それが、遠野志貴とアルトルージュ・ブリュンスタッドの出会いであつた

( side - alt - )

そうね、大体50年ってどこかしら？

志貴と私が出会ってから

なんで志貴に会おうとしたかつて？

それはね、わたしの妹のアルクエイドを、不意を付いたとはいえ、バラバラにして、さらに死徒27祖を3体も滅ぼした人間ですもの。

気にならないわけが無い…でしょう？

彼はすぐに見つけられたわ。

だってこの世界に調和しているようで、調和していない、チグハグな存在だから。

それにしてもいきなりナイフを持って襲ってくるとは思わなかったわ。

たった一本の…何の変哲もないナイフで

でも、確かに感じてしまったの。  
彼の目の奥に有る、底知れない 死 の存在を

純粹で無垢で…まるで完璧な芸術品を思わせるような

最初の出会いにしては、少々過激だった気もするけど、今となって  
はいい思い出ね。

「はじめまして、遠野志貴。私は死徒27祖が5位、アルトルージュ・ブリュンスタッドよ」

彼女はそう名乗った

敵意は無いと感じていても本能的に身構えてしまう

彼女はそれほどの存在感であった

退魔衝動を超越する本能

その本能は俺に逃げるように命令を下している

「今日は私の妹のアルクエイド・ブリュンスタッドの事について話があるの。」

アルクエイド？

ブリュンスタッド？

こいつは…

「そう、私は彼女の姉のようなものよ」



「…アルクエイドはも「知っているわ。」

アルクエイドが目的では無いのか？

以前、アイツは知り合いなどいないと言っていたが…

「あなたに用があるの。あの、アルクエイドを殺し、27祖を3人も屠ったあなた、そう志貴に。」

俺…に？

直死の魔眼の存在が、ばれている？

「単刀直入っていうのかしら？、とにかくあなたはあの子、アルクエイドに会いたくないかしら？」

アルクエイドに会える？

もう一度？アルクエイドに？

「そう、ただしあなたには私の死徒となってもらっけど」

俺が死徒に？

「あの子と一緒にいられるし、直死の魔眼があなた自身にける負荷も減る。良いこと尽くめじゃない。」

直死の魔眼を知っている？

いや、それよりも…

「なぜ？俺にそんな事を？」

「そうね…、言ってしまうえば手駒が欲しいのよ。強い手駒が。」

「別に24時間拘束するわけではないし、普段はあの子の側にいて構わないわ。」

アルクエイドの、アイツの側に居られる。

何を迷っている？

秋葉や遠野のみんなと別れたくないのか？

そう、何を迷っているんだ

アイツのそばに居る事、それが遠野志貴の生き方じゃないか。

「答えは出たようね。とは言っても初めから選択の余地は無かったのだけねど」

そうしてこの日、遠野志貴は人間を捨てた

…ホント最後まで秋葉には迷惑をかけたばなしだったな

あの後、俺は秋葉達に手紙を書いた。

俺が遠野を捨てた事、アイツの側にいるために人間を辞めた事を書いた。

返事は、琥珀さんと翡翠が書いてくれた。

秋葉はシヨックの余り倒れてしまったそうだ。

とにもかくにも、俺が死徒になった後でも、遠野家には年に一回ほどは行くようにしていた。

当然ながら人間というのは短命なもので、80年程でみんないなくなってしまうた。

3人とも結局結婚しなかった

そのため、遠野家は有馬、久我峰、などに分割された。

養子を取る案も有ったようだが、秋葉が断固として反対したらしい。

秋葉を看取った時、涙が止まらなかった

そしてアイツ、アルクエイドはいまだ目を覚まさない

死徒になってから数百年がたった

相変わらず人間達は変わらない

戦争も絶えない

まあ、それについては俺達死徒もかわらない事だけど

死徒になった瞬間世界が変わった

直死の魔眼による負荷がほぼゼロになった。

いやむしろ、死を理解することに喜びさえ感じたんだ

そうそう、俺は死徒27祖第10位を継承した。

殺人貴として

先輩の敵になっちゃったね

まあもつとも、今はもういないけど

そういえば、アルクエイドが俺の体を修復するのに使ったネ口の一部、あれが自我を持つようになった

いちいちうるさい奴ではあるものの、役に立つ事は多い

死徒になってから100年ほどは、白翼公の軍隊に苦戦もした

しかし今では、祖足り得る力を手にしたと言っていいだろう

アルトルージュ配下の白騎士、黒騎士に迫っている今となっては

アルトルージュも今のところ大きな戦争は起こす気はないらしい

そこで俺はアルトルージュにある頼みごとをする事にした。

今、俺はアインナッシュの森にいる

草を踏み分ける音だけが、森に響く。

なぜ死の森と呼ばれるのか、その所以が分かったような気がする。

一週間して、ようやく中心に着いた

そこにはただ大きな木が存在しており、周りは開けた広場となっている

そしてその大木の中心に、輝くような赤い宝玉が存在している

俺はそれを手に入れる為にナイフを構えて…

「アインナツシユを知っているかしら？志貴。」

アインナツシユ？

死徒27祖の？

「そう、それよ。」

それがどうした？

「曰く、アインナツシユの実を手にした者は、吸血衝動を無くす事が出来る、と」吸血衝動が？

「そうよ、それがあればあの子は目覚めるかも知れないわ」

…そう、そんな事が有った。

俺は今、襲いかかってくるアインナツシユの枝をかいくぐり、実を  
手に入れようとしている。

正直限界が近い。

打開策を見つける必要がある。

俺は枝を地面に伏せて避けると…

…地面？

地面の奥に死の点があることを発見した。

俺は死徒の身体能力を活かし、迷わずその点を衝いた

その大木は突如として生を失った

いや、正確に言えばアインナツシユか



大木自体は生きている

俺は理解する

アインナッシュは大木をりどころとしていたのだと…

俺は、ゆっくりと立ち上がり、その実を穫った

結果として、効果があったのかはわからない。

アルクエイドは依然として目を覚まさない

俺の横の玉座で眠り続けている

まあ良い。

人をいつまでも待たせるのはバカ女らしいな、なんて思って

時間ならたつぷり有る

アイツの眠り続けた800年に比べたら、何でも無い。

そう思いながら立ち上がり、城の外にでようとした瞬間、目の前に  
銀色に輝くゲートが現れて…

殺人貴は、この世界から消えた

005 (前書き)

なんかいろいろダメな気がする

あ、ちなみにアンチルイズです

( Side - l u i s e - )

その日、ルイズは焦っていた

何度呪文をとнаえて、杖を振っていても、使い魔のつの字も出ない  
度重なる失敗に、周りの同級生達もやはりルイズはゼロのルイズで  
あるとはやし立ててやまない

今日こそは、今日こそはゼロの汚名を返上してやるとばかりに意気  
込んでいたが、その気力も尽きかけていた。

( 何で出てこないのよ! ! ! )

何が悪いっていうのよ! ! ! ( )

15回程過ぎただろうか、彼女の教師であるコルベールは彼女の不  
憫さを見て、彼女の召喚を一時中断させるべきか迷っていた。

彼、コルベールは、その冴えない風采に似合わず教師として生徒の努力を汲み取る事が出来たので、彼女の頑張りは当然知っていた。

いや、むしろ知っていたからこそ、迷っていた。

彼女は名家中の名家、公爵家出身である。

それだけに彼女に大しての期待は大きかったのだろう。

20回を過ぎただろうか。

流石にコルベールは他の生徒の不満を汲み取る意味も有って、ルイズに今日は後一回にして、後日再度召喚するように提言した。

そして、最後の召喚の時

、彼、はやってきた。

「世界で一番美しく、気高い使い魔よ。私のもとに現れなさい！！」

そんな、少々個性的な召喚の呪文によって。

煙の中から現れた彼は全身真っ黒で、そして目に包帯を巻いていた。

ルイズは召喚に応じたものが変な恰好をした平民である事にがっか

りした。

周りでは、さらに野次が飛び交っていた

困り果てたルイズは、コルベールに指示を仰ぐ事にした。

「ミスタ・コルベール！」

「なんだね？ミス・ヴァリエール」

「あの、もう一度召喚させてください！」

しかし、ルイズの願い虚しく、コルベールに一蹴されてしまった。

なかばヤケにルイズは今まで黙っていた彼に近づき使い魔契約を行おうとした時、彼は、その沈黙を破り、コルベールに問いかけた。

「これは、どういふことだ？」

と。

そして彼から放たれる若干の怒気に、私は固まってしまった。

(Side shiki)

何が起きたんだ？

俺は城にいたのに…

煙が晴れると目の前には…魔法使い？らしき恰好をした子供たちがいる

子供たちは欧米人のように見えるが…

魔術師が何かしたのか？

とにかく解らない。

俺は疑問に思いつつ、黙っていた

目の前ではピンク色の髪をした女の子、13、4歳ほどの女の子が慌てた様子で、保護者らしき人物と会話している。

言葉は、どつやら通じるみたいだ

その会話の中で、断片的ではあるものの、自分のおかれた状況がわかってきた。

どつやら俺は召喚されてしまったらしい。

使い魔…として

そしてこちらを無視しし続ける少女に若干いらつきながらも、その場の責任者であるとおぼしき、中年に声をかけた。



「これは、どついでとだ？」

「どついで俺は召喚されたようだが…、召喚者は誰だ？」

……なつ、なによ、あいつ。平民の癖に生意気な口を聞いて……！  
ちよつと、びっくりしちゃっけど…

だめよ、ルイズ。こついうのは最初が肝心なんだから……！！  
今のうちに上下関係をしっかりさせておくのよ！

「わつ、わたしがあんたを呼んだのよつ！全く、無能そつな使い魔  
でがっかりよつ……！！」

「使い魔？俺が？」

「いいわ、後でみっちり教えてあげる。さっさとこっちへ来なさいっ！！！」

しかし、ルイズの叫びは虚しく響く。その男はまるで動かない。

ただ、ブツブツと呟いているだけ。

しびれを切らしたルイズは、大股でその男の元へ近寄り、おもむろに召喚の儀式を行おうとする。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、私の使い魔となせ」

そして、杖を志貴の額に置くと、志貴の唇に、自分のそれを重ねようとし、否、出来なかった。

志貴に肩を掴まれ、強引に距離をはなされる。

ルイズは当然の事に戸惑ってしまった。

一方、その相手の志貴の心中は、決して穏やかとは言えないものであった。

アルクエイドのそばにいられない。

そんな、志貴のすべてを奪い去り、あまつさえ、この身を同意無く使い魔とさせるような出来事を静観し、受け入れる程人間は出来ていない。

むしろ、それだけに抑えられたのは志貴本来の優しさの賜物であったといえる。

改めてコルベールに志貴は問いかける。

「一体、なにがおこっているのか？」  
と。

コルベールの答えは、流石に職業が教師で有るだけ簡潔で要領を得ている

彼の答えをまとめると

- ・これはトリステイン魔法学校の春の召喚の儀式であること。
- ・各々はそれぞれ、各自この世界の生物を呼び出し、それを使い魔とすること。

- ・その生物は通常、動物で有り、人間が呼び出されたのは初めてであるということだった。

志貴は自分の予想内であったことに呻いた。

そして肝心の懸案

すなわち自分がもとの世界に戻るのか、ということについて、コルベールは

「残念ながら不可能である」

との結論を出す。

その瞬間、志貴に絶望が襲いかかった。

改めて周りを見回す。

なるほど、多種多様な生物がいる。

と、そこで志貴は先ほどの召喚主に目を向けると、その少女はまるで親の敵のようにこちらを睨みつけ、とんだ戯言を吐き出した。

「使い魔は使い魔らしく、ご主人様の言うことを聞きなさいよっ！  
！！」

流石にこれには志貴も、堪忍袋の緒が切れざるを得なかった。

「人を勝手に呼び出しておいて、どの口がそういう事をいうのか？」

若干、殺気とでもいうのだろうか、とにかく殺人貴としての気配を滲み出だせつつ、志貴は少女に語りかける。

この気配に流石にルイズは黙ってしまった。

そして今更ながらこの青年がただの平民では無いと理解する。

それはコルベールにも言えることであつた。

かつて炎蛇とまで呼ばれた自分を遙かに超える殺気、そして改めて青年の身のこなしに、達人ともいえるような気配を感じ、いかにこの場を抑えるか、彼の脳は今や休むことなく働いている。

こうして、死徒27祖第10位殺人貴はハルキゲニアの地に降臨することとなつた。

しばらく辺りを嫌な沈黙が支配する

周りにいた子ども達の中には気絶してしまった者達もいるようだ。

志貴は自分が少し幼かったかなと反省し、これからどうするかをコルベールと話し合うことにした。

さて、志貴とコルベールは責任者である、学院長オールド・オスマンとの面会の為に一足早くコルベールと共に学院へ向かうこととなった。

なお、コルベールが呪文を詠唱し、宙に浮いて移動しようとしたことに志貴は改めて自分が異世界にきてしまったと言ったことを感じたことは余談である。

その際コルベールは志貴も浮かせて移動する事を提案したが、志貴は断った。

自分で移動した方が早いという理由からだった。

事実、志貴は人間には有り得ない速度を出している。  
さらにまだ余力が有りそうな事をコルベールは感じ取り、頭を抱えざるをえなかったのもまた余談であったりする。

召喚自体は、ルイズのそれが最後であったため、生徒達は各自帰投するようコルベールに指示されていた。

そのため、残された生徒の大半は、志貴の発する圧力から解放され、思わず安堵のため息を発すると共に、怯えてしまった自分の使い魔と共に学院へ先を争うように帰って行った。

もちろん、志貴とコルベール、特に前者を避けて帰って行ったことは言つまでもなく無かつたりする。

さて、生徒たちの一部は早速ルイズを責め立て始める。

「やはりゼロのルイズはゼロであった。」  
とか、そういった類である。

中には

「ゼロではなくマイナスであった。」

などと言い出すものまでいる始末である。

ルイズ自身、今回のことは流石に堪えたのであろう、いつもの強気な態度はすっかり消え、涙が落ちる寸前である。

ルイズはいたたまれなかった。



しかし、野次の中のとある一声は、ルイズを再燃させる事となった。

そう、ヴァリエール家を馬鹿にされたのだ。

誇り高き公爵家であるヴァリエール家をだ。

ルイズは昔から自分の出自に非常に誇りを持っている。

そう、ハルキゲニアの身分制度にどっぷりと浸かってしまっている  
のであった。

それに、とルイズは考える。

良く考えればさっきの平民は強そうだったじゃない…

これは始祖ブリミルのご意志なのかしら？

…そうよ！そうにきまっているわっ！

これはブリミル様が私に課せられた試練なのよ。

いかにあの平民に身分の差を理解させるか…、やってやるっじゃないの…！！

なんとも傍迷惑な理論である。

そうとなれば早速行動あるのみとばかりに学院へ向けて早足で移動を開始する。

ルイズの心中は先程と打って変わって、まるでこのハルキゲニアの抜けるような青空の如しであった。

――トリスティン魔法学校学院長室――

そこには苦渋に満ちた顔のオールド・オスマンと青い顔をしたコルベール、そしてまた、苦虫を噛み潰したような顔の殺人貴の姿があった。

オスマンは、自身が偉大な魔法使いである。それゆえに分かってしまう。

この目の前の青年がいかに化け物であるか。

ディテクトマジックをかけるまでもない。

オスマンは先程の事を振り返る。

「俺を元の世界へ今すぐ送り返せ」

開口一番青年はこう言った。

「それは無理じゃ」

そう答えた直後、青年から発せられた怒気は尋常ではなかった。

それはオスマンが今まで感じてきたその経験をまるで否定するようなものであったと言えるだろう。

コルベールのとりなしによって、なんとか冷静さを取り戻した志貴とオスマンはひとまず状況を整理することとなった。

オスマンが驚いたことに、志貴は吸血鬼と呼ばれる存在であり、すでに300歳を越えていると言ったことがあった。

化け物という自分の比喻は間違っていないかったと改めて思う。

さて一方の志貴は半ばあきらめかけていた。

しかし、オスマンの図書館に有るかもしれないとの言葉に一縷の望みを託すことにした。

志貴の要求は3つ

衣食住の提供

血液の提供

帰還手段の速やかな発見

当然ながらオスマンは受け入れる

その見返りとしては

学院内でむやみに暴れないことや使い魔契約の形式上の履行の二点であった。

元より志貴は善人であるのでこれらの条件は、すんなりと通ることとなった。

ちょうどルイズも学院に帰還していた為、契約は直ぐに実行されることとなった。

志貴とルイズは改めて対面する。

志貴は無表情である。

ルイズは無表情さを装っているが内心動揺している。

ルイズが呪文を詠唱し、志貴に接吻する

志貴は左手に違和感を感じるも、召喚のルーンかなにかであろうと推測し、あまり気にならなかったのでは有るが、コルベールがやたらと熱心に観察して、写しを取っていたことは気になったので、後でコルベールに聞いてみようと思った

さて、ここに契約は完了した。

さまざまな思いの下に。

志貴は移動していた。

もう時間も遅いとのことでもた明日オスマン達と諸所話し合おうらしい。

…それにしても、あのルイズという女、つくづく頭の中身を疑いたくなる。

契約が終了したとたん、威勢を取り戻しご主人様の命令を聞きなさい、と来た。

志貴はもうその時点であのルイズという女を見限る事に決めた。

さて、学院長の用意した部屋に到着したようだ。

俺を案内していた秘書のような女性、ロングビルさんといったか、非常に礼儀正しく好感が持てる。

「お部屋へ到着しました。今夜は申し訳有りませんがこちらでお過

ごし下さい。なにぶん急なもので、出来る限りのご用意はさせていただきますでしたが、至らぬ点がございましたら、後で学院のメイドへお申し付け下さい。」

「ああ。ありがとう、ロングビルさん。」

そう一礼と共に去っていく、よく見るとなかなかの美人さんだ。

志貴はますます好感を持った。

「部屋に入るか」

そう1人ごちるて部屋のドアを開けると、まあなんとというか、いかにもな貴族の寝室だった。

きっと来客用なのだろう。あまり使われた様子はない。

部屋の奥にはベッドが置かれている。

キングサイズの二倍ほどだろうか。

少なくとも遠野の家での生活や、アルトルージュの城での生活が無かったらまず圧倒されていたであろう大きさだった。

もちろんというか天蓋もついていて、レースで縁取られている。

他にはと、周りを見ればなかなか良い調度品が揃っている。

よく手入れがされているであろうそれらはその年季と相まって上品さや落ち着きを手に入れている。

それに、遠野家のものにどことなく似ている気がする。

志貴は思わず気に入ってしまった。

何にせよ、今日は疲れた。

今日はこれで寝ることにしよう、そう思ってベッドに潜り込もうとして、志貴は慌てて靴を脱いだ。

まるで、中世のヨーロッパのようだ、そんな事をぼんやりと思う。

ベッドに寝転がると、丁度窓から外が見える。

志貴はなんとなしに覗く。

「月が…2つ有る。」

もはや何も驚くまい。ただ、その欠けるところの無い双月は、アイツを思い出させる。

「今夜も月がきれいだ…」

やはり月は綺麗だ、薄れ逝く意識の中でそんなことを思う。

そして意識が消える瞬間に月とアイツが笑っているのが重なって…



ミス・ロングビルは早足で歩いていった。

「人畜無害そうに見えるてあれは反則だねえ…どうしてくれようか…」  
つい本音漏れ出してしまふ。

彼にはまるで勝てる気がしない。  
いや、学院長も含めてこのハルキゲニアに彼に勝てるものはいない  
だろう。  
今思い出しても身震いがする。

一時盗賊稼業はやめるべきかなとなんて独り言をつぶやきながら彼女  
は去っていった。

「ミス……志………ター……貴、ミスター……志……」

そんな声が聞こえる。

そして体を揺すられる感触

「ミスター……貴、ミスター志貴。」

そしてまた体を揺すられる感触

……懐かしい感触。

また声と共に体を揺すられる。

ああ、今起きるよ、翡翠……

志貴はいうことを聞かない体を時間をかけて起こし、あたりを見回し、翡翠を探した。

しかしそこに翡翠の姿はなく、変わって見たことの無い少女がいるのみであった。

志貴は呆然としてその少女を見つめる。  
その少女は翡翠のその赤い髪と違い、黒い髪の毛であったが、どことなく翡翠に似ているような気もする。おまけにメイド服まで着ている。志貴は翡翠が髪の毛を染めたのかな、なんて呑気な事を考えていた。

志貴に見つめられた少女は戸惑った様子ではあったが、突然弾かれたように頭を下げ

「申し訳有りませんでしたっ！貴族様のお体を触るなどという無礼をどうかお許し下さいっ！！！」

と、すごい勢いで謝りはじめてしまった。

「揺すってしまった…、ただ死んでいるように見えて……」

などと早口で謝罪の言葉を述べる。

志貴はここに来てようやく事態を把握する。

アルクエイドと会えない。

そうなってしまった。

志貴は突如として暗い気持ちになってしまった。

それが顔に現れてしまったのだろう。

その少女はさらに慌てた様子で謝りはじめてしまった。

「あ、ああ。いいよ。気にしてないよ。起こしてくれてありがとう。」

志貴はとりあえず目の前の少女をなんとかしようと思った。

.....

どうやらこの少女の名はシエスタとってこの学院のメイドらしい。

俺を起こして食堂へ案内するように命じられたらしい。

俺はまずシエスタにミスターという呼称をやめて貰うように頼んだ。

堅苦しくて。まるで翡翠の時みたいだ。

しかし、その少女は最初それを徹底的に拒んだ。

平民が貴族に対して恐れ多いとのこと。

この学院に来てから、気になっていた事に平民と貴族というものが有ったのでこの機会に聞いてみた。

「平民と貴族っていうのはそんなに違うのかい？」

シエスタは逡巡した後にごう答えた

「あの、ミスター志貴は貴族様ですよ。であるからにはご存知だと愚考しますが。」

「あ…、シエスタは学院から俺の事を何て聞いているの？」

「非常に位の高いメイジ様であると、聞き及んでおります。」

「いや、俺はメイジでもないし、貴族でも無いんだよね。信じられないかも知れないけど、異世界から召喚されたんだよね。」

「ほ、本当でしょうか？」

「うん。本当なんだよね。だから平民と貴族って言うのがよくわからなくて…。」

「そうでしたか。」

「あ、うん、だからそんなに畏まなくていいよ。」

「いや、しかし…。」

「その方が気が楽だからね。」

「そうですね…、では志貴さんと呼びますね。」

そんな問答の後、シエスタにこの世界の事を話して貰った。

貴族は始祖ブリミルの血を引いているために神聖で絶対であると考え、平民はそれに従うしかないとか。

ここトリスティン魔法学院は貴族の子弟が魔法を習う為の学校であるとか。

…なるほどなるほど。

非常によくわかった。

志貴はついでにルイズについて聞いてみた。

なるほど、そのルイズは公爵家という非常に位の高い家柄であるらしい。

志貴は妙に納得し、またルイズに対する嫌悪を増した。

そして、シエスタに聞かれてつい吸血鬼であると言った瞬間、また怯えられてしまったのにはやはりかと思ってしまう。

やはり吸血鬼はこの世界でも畏怖の対象であるらしい。  
少し悲しく思う。

志貴が別に無闇には襲わないからとシエスタを説き伏せるのには30分を要した…という。

もともと心優しく理解力のあるシエスタである。

この時よりハルキゲニアにおける志貴の数少ない友人の1人となった。

さて、もともとのシエスタの役割は志貴を食堂へ連れて行く事である。

ふたりは遅らせながら、食堂へ向かうこととなった。

志貴が食堂に着いた時には既に食事が始まっていた。

それにしても、と志貴は思う。

そう、食堂は広がった。それもとてつもなく。

おそらく小さな体育館ほどであろう。

重厚なテーブルが整然と並べられ、またその上に、とても朝食とは思えない程豪華な料理の数々が彩っている。

おそらく全生徒が居るのである。

食堂は生徒たちに満ち溢れ、活気があった。

そしてシエスタと同じようにメイド服を着た学院のメイドが忙しそうに歩き回っている。

「朝から豪華な食事だなあ。」

「貴族の御子弟様のお食事ですから」

「ん〜、とてもじゃないけど食べきれないそうに無いなあ。残っちゃうんじゃないの?」

「そうですね。いつも半分ほどは残っちゃいますね。でも少ないとそれはそれでまずいんです」

「あ〜、貴族だからね〜」



そんな会話をしつつ、シエスタに案内をされる。

どうやら来賓用のテーブルらしい。

広いテーブルに1人ですわる志貴は若干の気まずさを覚えてしまう。

それに、少し離れた教員用のテーブルでは教員のほぼ全員がこちらを見てひそひそとしている。

どうやら今後どうするかとかなんな事を相談しているらしい。

中には私の風で彼に身の程を思い知らせてあげましょう、なんて意気揚々としている教師もいる。

死徒の身体能力により否が応でも耳に入ってきてしまう。

さらにといつか、志貴がシエスタに連れられて食堂を歩いている最中から生徒たちの視線も感じる。

気まずい。

無論、負けるわけが無いと分かっている。

そんな事を考えながらフォークを手に取り、前菜であろうそれを口に  
いれる。

「……おいしいー！」

目の前の朝食はそれを払拭してなお余りあるおいしさだった。

秋葉やアルトルージュと行った三ツ星に匹敵するだろう。いや超えているかもしれない。

志貴は次々と口に運ぶ。

昨夜から何も食べていないせいもあるうか、志貴の手は止まらない。

あっという間に食べ終えてしまう。

どうやら志貴が食べ終わるのを待っていてくれたらしいシエスタがデザートを出してくれる。

プディングのように見えるそれは、初めての味だった。もちろんおいしいのであるが。

聞けばこの地方の伝統的なデザートであるとのこと。

志貴の様子を見て取ったシエスタは、厨房に余りが有るか聞いてきてくれるらしい。

志貴はシエスタを待ちつつ、しばらく食休みとして食堂を見回す事にした。

それにしても見れば見るほど、生徒それぞれ、個性が際立っている。どうやらハルキゲニアでは髪の色が人によってかなり違うらしい。

ミス、…そうロングビルは緑色だったし、食堂には金色、赤色、青色と色とりどりだ。

・・・

しかし、あのご主人様の用なピンクの髪は他にいなかった。

あちらでも珍しかったがこちらでも珍しいらしい。

そんな事をぼんやりと考えていると視界の隅に騒動を見つける

何やら金髪の生徒が2人の女生徒に詰め寄られている。

「やはり遊びだったのですね」とか「嘘つき」なんて聞こえてくる。

…あ、ビンタされた。

小気味良い音が辺りに響きわたる。

そのそばには…シエスタがいる。

どうやら例のプリンを持ってきてくれたらしい。トレイにのせて持っている。

ありがたい。

しかし、どうも様子がおかしい。

例の金髪の生徒に絡まれているようだ。

シエスタは始終俯き謝っている。見ていられたもんじゃない。

俺はすぐ立ち上がるとシエスタの元へ向かうことにした。

012 (前書き)

戦闘パートは脳内補完してくれるとありがたいです

シエスタと例の金髪の少年のもとへたどり着く。

金髪の少年はこちらに気づいていないのか、苛烈にシエスタを責め立てている。

どうやらシエスタが少年の落とし物を拾った事が発端のようだ。

「君は僕が知らないと言った時に、機転を利かせるべきだったんだ！……これだから平民はっ！」

なんとも身勝手な言い分である。

志貴は我慢出来ずにシエスタとその少年の間に割ってはいる事にした。

「そこらへんにしたらどうだい？彼女には何の非も無いだろう。それにもとは言えばキミの二股が原因だろう？」

少年の周りにいる友人たちは次々とその少年、ギーシュというらしい、をはやし立てる。

その少年はやっとこちらを振り向き、志貴を上から下まで見回す。

そして小馬鹿にした表情になる。

「君はどうやら平民のようだね。上から下まで真っ黒の汚らしい服を来て。君は…そうか、ルイズの召喚したっていう噂の使い魔君だね、どうやら貴族に対する礼儀も知らないらしいね。」

どうやらこの少年、志貴が召喚された現場にいなかったようだ。少年のまわりにいる、友人達も同じらしい。

食堂の中には志貴を知るものもいるらしく、慌てた様子である。

教師達はもう大慌てである。

しかしながら、やはり我が身可愛さ故か、こちらに首を突っ込もうとするものはいない。

惜しむらくはここにオスマンやコルベルがいなかった事であろう。

ギーシュは一人で声高らかに口上を述べている間にヒートアップしたのだらう。

ついに志貴の足元に自身の手袋を投げる。

「いいだらう、君がそのメイドをかばいたてると言うのならキミがその責任をつけるべきだ！…！」

どうやら決闘することになってしまったらしい。

当の志貴はプリンを食べ損ねてしまった…なんて悔やんでいる。

シエスタは不思議と志貴が負けることは無いだろうと思いつつながらヴェストリの広場へ志貴に付き添って向かう。

「諸君！決闘だ！」

ギーシュは薔薇の増加を掲げる。

ヴェストリの広場は観衆で埋め尽くされていた。

そしてギーシュはいちいちその観衆の声援に応えている。  
志貴はうんざりしてきた。

ようやくギーシュがこちらを向く。

「とりあえず、逃げずに来たことは、誉めてやるつもりじゃないか」  
ギーシュは薔薇の花をいじりながら言った。

志貴はもう本当につんざりしてきた。

「さて、僕はメイジだ。よって魔法を使ってお相手させていただきます



う

そんな言葉と共に薔薇の花を振る。

すると薔薇の花びらが一枚落ちて、地面と接したとたんに甲冑を身にまとったような女戦士の人形が現れる。

どうやらコレが彼の魔法のようだ。

「僕の二つ名は『青銅』、いけ、ワルキューレ！」

なんて声高に述べていることからすると、どうやらこれは青銅のようだ。

そんな事を考えているうちに目の前にワルキューレが現れる。

志貴はそのワルキューレの攻撃を…避けなかった。

そう、重ねて述べるが志貴は死徒である。しかも27祖の1人である。

死徒としての身体能力に加え、自身の魔力による肉体強化の前では、ワルキューレなど、羽虫にも満たない。

ちなみに、死徒は恒常的に魔力を身にまとっている。

アルトルージュや黒騎士、白騎士もまた当然しかりである。

アルクエイドは真祖で有るためまた違うのでは有るが。

「なっ……!」

ギーシュは驚愕する。

ワルキューレの攻撃が直撃したにも関わらず、ダメージを与えられず、さらにそのワルキューレを文字通り裂かれて、しまったのだから。

志貴はワルキューレのパンチを受けたあと、ワルキューレの肩をつかんで、文字通り真っ二つに裂いた。

志貴にとっては何でもない事では有るのだが、周りには違ったようだ。

特に目の前のギーシュは顕著である。

顔を驚愕に染めながら必死にワルキューレを作り出している。

5、6、…7体が、一気にこちらへ向けてくる。

「殺せっ……!……!アイツをこっちに近寄らせるなっ……!……!」  
必死である。

志貴は思わずため息をつく。

「まったく、どうかしている。」

さらにギーシュに向かって言う。

「教えてやるよ、これがモノを殺すってことだ」

そう言っつて志貴は七ツ夜を取り出す。

不思議な事にいつもより体が軽い。

ワルキューレの死をもはっきりと見える。

志貴の姿が消えた後、そこにはワルキューレの姿は無く、変わって志貴がギーシュの目の前にいた。

志貴はギーシュの首筋にナイフを突きつける。

「降参するか？」

もはやギーシュに戦意は無い。

そこには、ただ頷くギーシュと死を体現しているような志貴がいた  
いう。

「これは…まずいのう」

「正直、……………予想外です。」

「彼には、勝てんじやろうなあ……………」

「王室に報告し、軍を要請いたしますか？学院長」

「ならぬっ！それはならぬ！！！それこそ取り返しがつかなくなってしまう。」

「しかし…これでは……………」

「彼は比較的温厚じゃ。少なくともこちらから手を出さない限りは大丈夫じゃ。これは何とかして帰還方法を探すしかないじゃろうなあ……………」

「そういえば、彼のルーンは……………」

「ガンダールブじゃ。困ったのう。只でさえ元があれなのに。」

「どうしましょうか」

「とりあえずは現状維持じゃ。当分の間中、学院の外に漏らさないように教職員や生徒に徹底させておいてほしい。頼んだぞ、ミスタ  
ー……………はて？なんじゃったけ？」

「コルベールです！」

「そうじゃった、そうじゃった。すまんのうコルベール君。」

そんな会話が学院長室では行われていたとか。

### 013 (前書き)

どもお久しぶりです

なんか前回、投稿文字数制限を回避するために、適当なコピペを貼ったら非難轟々でした。

彼らはきつと日本語が不自由なんですね。

今回、なんていうか駄作も駄作です。

志貴を死徒化して、かつ300余歳にしてしまったために、オスマンとのパワーバランスが取れません。

そのためにオスマンの口調がおかしくなってます。  
ごめんなさい

今回はホントダメなんでまた書き直すかもしれません。

あ、あと今後なんですが、ハルキゲニアからさっさと退場させて、ネギま!？の世界に飛ばそうかな、なんて考えてたりもします。

そっちの方がパワーバランスもとりやすそうですし。

なんていうか迷走しててすいません

ちよっ、ちよっとなんなのよあれっ！

圧倒的じゃない！

流石、私が召喚した使い魔ね！

…でも、どうやって言うことを聞かせようかしら。

……………そうよっ！ 飴とムチよっ！！

そうね。飴が足りなかったのね。ふふふ…みてなさい。

きつと寛大な私にひれ伏すに違いないわ。

なんたつて私はヴァリエール家の三女ですもの！

はあゝ。一目見た時から思ってたけど、やっぱり彼ってステキ…。

ちよっと危険な雰囲気に加えて、あの強さ。

私のハートに火がついちゃった。

ね、彼ステキだと思わない？ タバサ。

「彼はとても興味深い。」

「あら、素直じゃないわね。さっきだっけと彼の事見てたじゃない。」

「彼はとても強い。」

「そうね。ギーシュのゴーレムを素手で裂いちゃったものね。」

「彼はその身体能力に加えて、何かしらの武術を使いこなしている。動きに無駄がなかった。」

「あら！タバサは彼の動きが見れたの？」

「断片的にしか見えなかったけれども。」

「すごいわねえ。」

「でもナイフを握ってからはほとんど見えなかった。分かったのはギーシュのゴーレムがナイフに触れた瞬間に消滅した、ということだけ。」

「あのナイフ、魔法を打ち消すような効果を持っているのかしら？」

「わからない。でも彼の目が蒼く輝いていた事と関係があるかもしれない。」

「あの蒼い目、ステキよねえ。見つめられたら、どうなるのかしら。そうよ。彼に聞いて見ましようよ。彼どこに泊まっているのかしら、タバサ、探しにいきましょう。」

「わかった。」



「志貴さんっ！！！ご無事でしたかつ！わ、私のせいでこんな事に巻き込まれてしまって、私本当に申し訳なくて。」

「ああ、気にしないで大丈夫だよ。それよりも…」

「えっと…ギーシュ君だったかな。」

「………は、はい。」

「まずは何か言わなきゃいけない言葉があるんじゃないか？」

「あつ、あああのすいませんでしたっ！！！身の程をわきまえずっ、何でもしますからっ命だけはっ「いや、謝る相手がちがうんじゃないかな？」え？」

「君は食堂で彼女に対して大変失礼な事をしたと思うんだけど。」

「そ、それは…」

「志貴さん、それはもう結構ですから…」

「いや、シエスタ。それはちがうよ、それともギーシュ君。彼女が平民であるというだけで自身の過ちを認めないつもりかな？」

「いや、そんなっ、め、めめ滅相もない！！！！」

「じゃあ早く謝らないといけないね。」

「あ、あゝ。ゴホンツ。先ほどは、誠に申し訳なかった。今考えると君に全く非は無かった。僕はこんなもので許してもらえとは思っていない。これからは、貴族、平民分け隔て無く、接していこうと思う。その努力を見てほしい。」

そういつてギーシュは深々とシエスタに頭を下げた。心から悔やんでいるように見える。

周りの観衆も、ざわめいている。

今まで、貴族が平民に頭を下げた事があつただらうか。

しかも、あのプライドの高いギーシュがだ。

しかし、そのざわめきの原因はそれだけではない。

すなわち、あの、圧倒的な力を持つルイズの使い魔は平民の味方である、ということだ。

もし、自分たちが同じ目に会うと思うと、生きた心地がしない。

結果として、この志貴とギーシュの決闘は、学院全体に、志貴の存在と強さを知らしめる事となった。

また、大多数の生徒たちが平民に対する態度を改め始めた事も付け加えよう。

理由は言わずもがなであろう。

コンコン、と軽いノックの音と共にシエスタの声

「失礼します。シエスタです。御命令どおり、志貴さ、失礼しました。ミスター・志貴をお連れしました。」

「ああ、良くぞいらっしやった。」

ギィ、と重々しい音とともにその重厚な作りのドアが開く。

志貴の姿が現れる。

オスマンは立ち上がり、深々とお辞儀をする。

「申し訳なかったのう。うちの生徒が迷惑をかけた。なにせ貴族の子息というのは、えてして、ぼんくらだからのう。やれ名誉だ、女だ、とそれしか考えられないのじゃ。いや…、これは貴族全体に当てはまるものではあるが。あ、立ちっぱなしにして、申し訳無かったのう。その椅子をお使いください。」

ソファに腰を下ろす。やわらかい。

「なんとかならないのか？」

「それがのう。今日までのハルキゲニアの歴史の積み重ねだから、そう簡単にはいかないじゃろう。そうそう、わざわざご足労頂いた件なのじゃが、相談したいことが少々ありましてな」

「1111での処遇か？」

「まさにそれですな。まず、誠に申し訳ないのじやが、元の世界に戻る方法は未だ、見つかっておらんのです。とりあえず学院の書庫は一通り探したのですがな。その、あまり実績が上がっていない、というのが実情であります。これから非公式に王宮の方へ打診してみようというところです。王宮の方にはこのハルキゲニアの秘宝が集まっていますから、おそらく何かしらありますように」

「そうか。」

「もう一つありましてな。それまでミスター・志貴がどうするのか、ということですよ。ミスター・志貴も300年ほど生きていらっしゃるが、異世界となればいろいろ珍しいことも多いじやろ。もし、良ければ授業を覗いて見たらどうじやろつか？」

「この学院のか…。まあ覗くぐらいであれば。」

「それは良かった。そう、他にも…」

どれくらいだったのだろうか。外を見れば夕暮れになっている。

細かい事は省くが、志貴の学院内での立場は絶対的なものとなった。まあそれを傘に横暴なふるまいをするつもりは全く無いが。

そうそう、その話し合いの結果の中で2つ重要な事がある。

まず1つ、学院の生徒に素性を隠す事だ。

吸血鬼であることは絶対だ

志貴は東方の王族ということになった。

家柄を重んじる貴族社会の中で、こうして置けばすんなり行くらしい。

そして、次に血

これは学院側で用意する

聞けば、血を使った魔法研究というのは、昔から行われていて血は市場に出回っていないこともないらしい。

これで当面の問題は無くなったかに見えるが

しかし、大きな問題はまだ存在する。

そうリーズだった

さてさて、志貴はオールド・オスマンの部屋から戻る道中である。案内役、まあ実質は監視役といったところだろう、ミス・ロングビルに伴われて。

しかしながら、と志貴は思う。

現時点で帰る見込みが、まるでない。

非常に由々しきことだ。

ところで、いつの間にか苦虫を噛み潰したような顔になっていたらしく、ミス・ロングビルの顔が真っ青になっていたのはまた余談である。その夜自室にて、志貴は悩んでいた

頭の中には帰還不能の四文字がちらついている

しかし… どうしたものか

まるで解決策は浮かんでこない　それどころか焦燥感が募るばかり

どうやら今夜は眠れない夜となりそうだ

いつの間にか朝になっていたようだ、日差しが照り込んでいるドア

をノックする音が聞こえた

シエスタでも来たのだろうかと思っっている内に、再度ドアがノックされた

焦っているのか、苛ついているのか、心なしかノックが荒い

誰かは分からないがドアを開けることにした

はたして誰なのだろうか、そう思いつつドアを開けるとそこには、あの“ご主人様”がいた

どうやら、居心地悪そうにしている、

「何か用かな？」

努めて優しく声をかけてみる

「わ、私はさつきオールド・オスマンに、あんたがつ、使い魔になるっていつから来たのよっ！」

「ああ、そのことか、しかしオスマンから聞いていないのか？俺は使い魔だが、迎賓待遇に処されると」

「え、き、聞いてないわよ、そんなこと！アンタは私の使い魔には変わりないわ。第一、その迎賓待遇のお金だって、ヴァリエール家の寄付の一部から出ているじゃない。恩返しするのは当たり前よっ！」



「その俺を勝手に呼び出したのは誰だ？」

“ご主人様” はうつと詰まった顔になっている、

そしてやっとの事で絞り出した言葉はこれだ…

「そ、それは…。でもとにかくアンタは私の使い魔なの！わかった？」

そう言ってマントを翻して駈けていった

志貴には全く持って理解出来なかった

“ご主人様” を

その後シエスタがやって来た

どうやら魔法学院の制服を届けに来てくれたらしい  
しかし、俺は断った

いつ何が起こるかわからない、備えは万全にしておきたい

しかし、そのままではあまりよろしくないのだとシエスタに説得され、しぶしぶマントを着ることで妥協した。

本来マントは貴族、すなわちメイジにのみ着用を許されるらしいが、まあ東方の王族とくに王族に多いらしいとのことで大丈夫らしい。

「良くお似合いですよ」

シエスタは誉めてくれたが、動きにくい

だが、仕方ない 我慢するしかないだろう

またシエスタに連れられて食堂へと向かった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0613/>

---

死徒として

2011年3月19日02時08分発行